



2019/20 Annual Report

NPO法人 World Theater Project
2019年度 年次報告書

みなさまのあたにかいご支援のおかげで、2019年度も各国の子どもたちに映画を届けることができました。心より感謝申し上げます。

ありがたいことに本活動に共感し、応援して下さる方々も増え、2020年はますます飛躍の年になるよう頑張らねばと思っておりました。矢先、2019年度の最後に当たる2〜3月より、新型コロナウイルスの影響を受け、カンボジアはじめ途上国現地および日本国内での活動を徐々に停止せざるを得なくなりました。

日々増えていく感染者数、亡くなられる方たち、悲しいニュースに触れるたび、「みなで集まって映画を観る」ということが不要不急であることを思い知らされ、また人が集まることを強みとしてきたこの活動が、誰かの命を奪う可能性があるという事実に打ちのめされました。

ご支援くださっているみなさまに、今は弊団体へのご支援を止めていただいて良いので、緊急に支援が必要な活動へ回してくださいと、コロナ禍のなかで何度もメッセージをお送りしようと思いました。

ただそのたびに、映画配達を生活の糧にもしているカンボジアの映画配達人たちの顔が浮かび、活動を再開でき

る日が来たときに、みなさまがいなければ続けていくことはできないのだと何度も手を止めました。

また私が発信するまでもなく、コロナ禍でご支援をやめられる方はたくさんいらつしやるのではと思っております。

また、私的なことではございますが、諸事情により入院生活を送っている期間がありました。

その間、コロナの影響で家族にも面会が叶わず、映画を観ることもできませんでした。

ご支援くださったみなさまへ



ました。しかしながら逆に、大変な時期にもかかわらず、新たに会員になってくださる方のほうが多かったです。

映画は不要不急と言われるときでも、子どもたちに映画を届ける活動の可能性を信じてくださる方たちがいるということに、どんなに励みをいただいたことでしょうか。

誰かと空間を共にできること、映画を観られることがどんなに贅沢で貴重なことであったのかを思い知らされ、何度も一人涙いたしました。

オンラインでつながり話すことができる便利な時代になりましたが、誰かと同じ空間で一体になって映画を観ていたあの時間がただひたすらに恋しい。

心の底からそれを渴望したとき、私たちの活動はたとえ不急でも、決して不要ではないのだと、そんな自信が湧いてきました。

2020年6月現在、日本の感染状況は一定の落ち着きを見せ、映画館も再開するなど嬉しいニュースを見聞きできるようになりましたが、海外ではまだ収まる気配はありません。

移動映画館を再開できていないなかで年次報告書の挨拶を書かせていただいていることに申し訳なさを感じておりますが、再開できた暁には、より多くの子どもたちに映画を届けていくことを約束いたします。またアフターコロナ、ウィズコロナのなかで、映画上映とともに何ができるかも、引き続きメンバーと共に考えていければと思っております。

大きな励みになってくださったみなさまに、心からの感謝の気持ちを込めまして。

(教来石小織)

Special Thanks

Dai Suzuki
Hiroki Iseki
Hiromi Ito
Hitoshi Fukaya
Kana Muratani

Kantaro Ozumi
Kazuhiwa Kawahara
Kazuyuki Hirose
Keitaro Tsuji
Kenji Sekine

Koichi Yamada
Kumiko Murakami
Morio Asaka
Natsumi Harada
Norihito Ariyoshi

Ryo Kadohira
Sana Goto
Satori Ito
Syogo Sasaki
Tatsuya Oda

Yasutoshi Tsukui
Yosuke Suzuki
Yuichi Namiki
Yumiko Iimori
Yusuke Furuya

Yuya Kamimura
Yuya Miyahara

WTP Member

Atsue Yamamoto
Aya Matsushima
Daichi Usui
Fumina Kyoraiseki
Hanae Uchida

Haruka Tsurusaki
Kenji Yamanaka
Midori Kondo
Minori Kawaguchi
Mizuha Hoshino

Naoyuki Shigemitsu
Natsumi Kikuchi
Nobuhito Nakatsuka
Ryo Kamei
Saaya Yakushiji

Tatsuki Kimbara
Tomoko Kawana
Toshiki Onishi



ミッションとバリューを刷新	P.6
上映作品に『はれときどきぶた』が仲間入り	P.11
映画を届けた子どもの数が延べ約8万人に	P.12
団体設立史上一番高い場所!?で上映会を開催	P.16
スタディツアー催行回数と参加者が過去最多に	P.22
イベントに参加して途上国を支援する「CINEMA AID」が誕生	P.24
国内支部に中国地方が参入	P.31
メンバーが夢を叶え、映画会社に就職	P.32
代表・教来石がフジテレビ系列番組『セブンルール』に出演	P.34

2019年度の活動の広がりをピックアップニュースとしてまとめました。

2019年度は、ミッション・バリューの見直しを行うなど、「映画の力」についてあらためて深く考え直すことができた一年でした。

CONTENTS

- 6 組織概要
- 8 海外事業
 - 12 カンボジア
 - 14 バングラデシュ
 - 16 ネパール
 - 18 単発上映
- 20 国内事業
 - 22 スタディツアー
 - 24 CINEMA AID
 - 26 その他活動報告
 - 28 国内支部
- 34 メディア掲載
- 36 支援のカタチ
- 42 財務会計報告



VALUE 私たちが考える映画の力

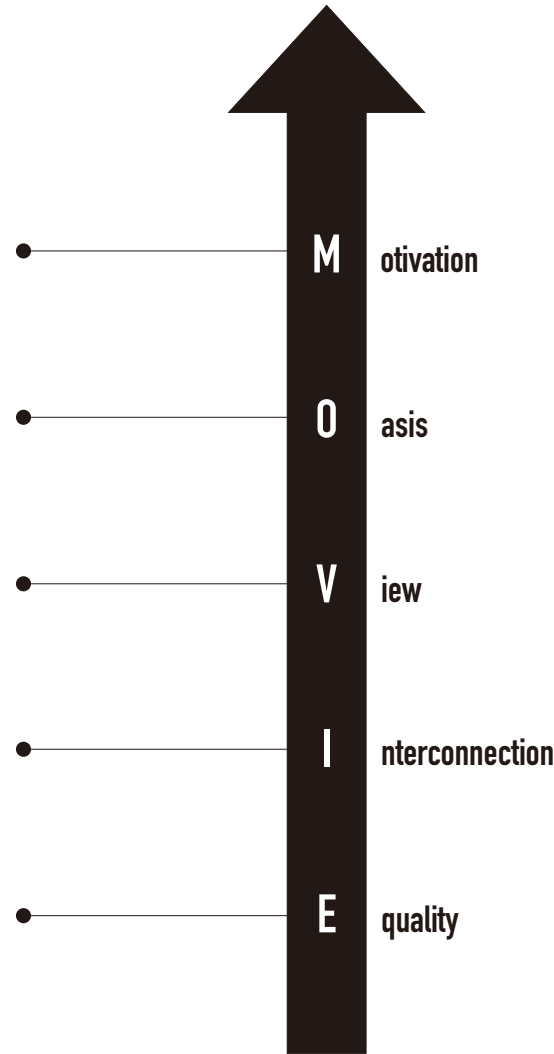
映画には、観た人の勇気を駆り立て、行動を起こさせる力がある。

映画には、観た人の心を潤す力がある。

映画には、観た人の感性を豊かにしたり、知識を与えたり、ロールモデルを教えたりして、視野を広げる力がある。視野が広がったことにより、観た人の未来の選択肢が広がる。

映画には、人々をつなげる力がある。同じ映画を観ることで、人々は空間や感情を共有し絆を深めることができる。

そして映画は万人に平等に、それらを届けることができる。



2012年に始まったWorld Theater Project (WTP) は、カンボジアをはじめとした途上国の農村地域など、映画を観られない環境に暮らす子どもたちに移動映画館で映画体験を届けています。私たちは、様々な世界や生き方を映し出す映画を届ける活動を「夢の種まき」だと考えています。これまでに延べ15カ国、79,268人の子どもたちに映画を届けてきました。(2020年3月現在)

ミッション・バリューの見直しを行いました

2019年度は外部アドバイザーとして薄井大地さん(特例認定NPO法人のEducation理事・松下政経塾第39期生)をお迎えし、組織の改変を行う一年となりました。その一環として、これまで7年間活動を続けてきたなかで私たちが大切にしてきた想いや、応援をいただいているみなさまから託していただいた想いを大事にし、WTPのより理想的な姿はどのようなものなのかをあらためて考えながら、これまでのビジョン・ミッション・バリューを見直すことといたしました。

《ビジョン》

これまでは、「生まれ育った環境に関係なく、子どもたちが夢を持ち、人生を切り拓ける世界をつくる」というビジョンを掲げて活動してまいりました。しかし活動を続けるなかで、映画が生み出す効果は「映画を通じて新たな夢を持つことができる」だけではなく、もつと複合的なものと気づきました。そこで、「唯一のゴールを設定する『ビジョン』を廃止し、映画が持つ複数の力を『バリュー』として再定義しました。今後は、「すべての子どもたちに映画

体験を届ける」というミッションを遂行しながら、これらの複数のバリューをより強く発揮していくことを目指して活動してまいります。

《ミッション》

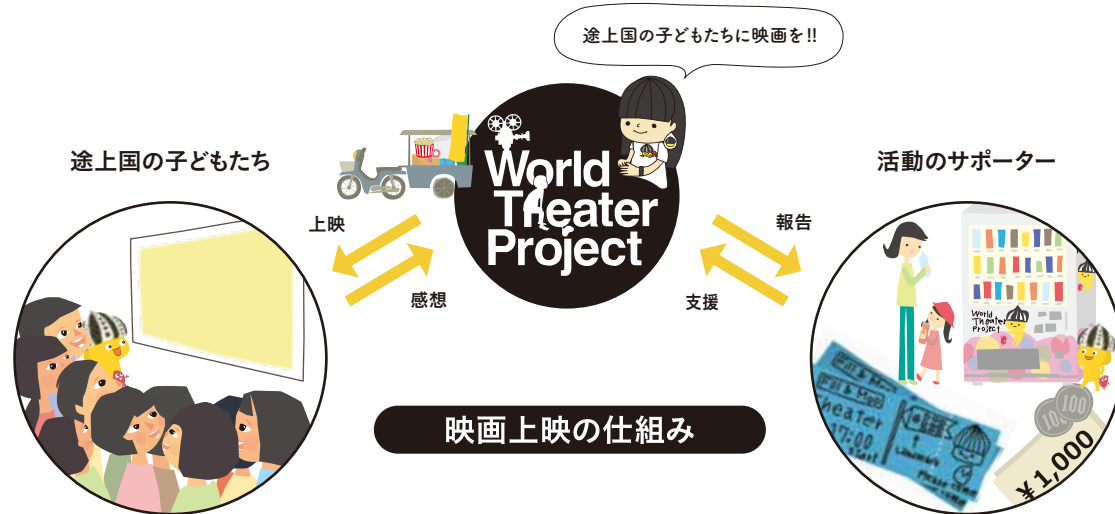
ミッションはこれまで掲げていた「すべての子どもたちに映画体験を届ける」と変わリません。「映画体験」という言葉には、私たちが届けるのは一人です。楽しむ「映画」ではなく、複数の人々と一緒に楽しい時間を共有する体験であってほしいという想いを込めています。

WTPはこれからも、途上国をはじめとする映画に触れる機会に乏しい場所の子どもたちのために活動を続けてまいります。

《バリュー》

これまではバリューとして「映画を観られる環境にいない子どもたちやコミュニティに移動映画館で映画体験を届ける」を掲げてまいりました。しかしこれはWTPという「組織の価値」を表したものであり、そもそも「映画の力」にもつと焦点を当てて見直すことが、今後の活動において重要なのではないかと考えました。バリューの見直しにあたって、WTP

メンバーだけでなく外部の方の声も取り入れながら、「映画の力」とはどのようなものなのか、映画体験を届けることにより子どもたちにどのような影響をもたらすことができるのか、あらためて深く考え直しました。その結果、映画が持つ5つの力を「MOVIE」を頭文字とする文言でまとめることができました。今後は、WTPはこれらの「映画の力」がより一層発揮されるように活動を進化させていく所存です。



OVERSEAS PROJECT

海外事業

「すべての子どもたちに映画体験を届ける」というミッションのもと、途上国をはじめとした国々の、映画に触れる機会に乏しい子どもたちに移動映画館で映画体験を届けています。2012年の活動開始当初より主な活動拠点としてきたカンボジアをはじめ、現地で活動されている団体・個人さまにご賛同いただき、現在ではバングラデシュ、ネパールでも定期的上映を行うことができます。その他にも、様々な国の方にご協力いただき単発での映画上映を行っていただいています。


2019年度は、1万4032人の子どもたちに映画を上映することができました。また、団体のバリエーションを新たにし、「映画の力」をあらためて見直しました。これらの力を今ままで以上に発揮できるように進化し、定期上映を行っている国の活動を大きくすることや他の国での上映活動を定期化していくことで、より多くの子どもたちに質の良い映画体験を届けることができるよう活動を続けてまいります。

私たちが考える「映画の力」を信じ、
より多くの子どもたちに映画体験を届けたい

上映作品


『はれときどきぶた』が2019年度より上映作品に仲間入りしました!!

この度、権利元である株式会社学研ホールディングスさまより上映の許諾を得ることができ、WTPの上映作品とさせていただきます。すでにカンボジアの公用語であるクメール語への吹き替えが終わり、現地で上映しています。今後も、子どもたちに生きる目的や心への栄養を与えてくれて、子どもたちが楽しむことができる映画作品を増やしていきたいと思っています。ご賛同いただいている権利元の方々に心より感謝申し上げます。




はれときどきぶた
株式会社学研ホールディングス


矢玉四郎のベストセラー童話『はれときどきぶた』と『あしたぶたの日ぶたじかん』のアニメ化。10円安がだなの則安くんが毎日つけている日記や個人新聞に書いた“空からぶたが降ってくる”などの荒唐無稽な出来事が現実になってしまうというストーリー。
(権利元 株式会社学研ホールディングス)




01 ハルのふえ
株式会社トムス・エンタテインメント




アンパンマンシリーズを手掛けたやなせたかし氏の絵本が原作となった、タヌキと人間の親子の絆を描いた感動のアニメーション作品。人間の赤ちゃん・バルを拾ったタヌキのハルは、人間の姿に化けながら、バルを大切に育てていく。成長したバルは、音楽家に笛の才能を認められ、ある決心をする。
(“HAL'S FLUTE” © Takashi Yanase / TMS All Rights Reserved)



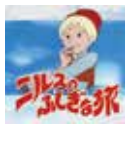
02 劇場版 ゆうとくんがいく
株式会社白組




サッカー選手・長友佑都選手をモデルにした主人公・ゆうとくんが、サッカーを通して成長していく姿を描いた短編アニメーション作品の劇場版。世界で活躍するゆうとくんの前に、強大なライバルが出現。さらなる成長を目指し、“レジェンド”と呼ばれる伝説のサッカー選手に出会う旅が始まる。
(権利元 株式会社白組)




03 ニルスのふしぎな旅
株式会社学研ホールディングス




スウェーデンの児童文学が原作となったアニメーション作品の劇場版。数々のヒット作を手掛ける押井守氏が演出を担当し、主人公の冒険の様子がいきいきと描かれている。主人公のニルスはある日、妖精を怒らせ、身体を小さくされてしまう。ニルスは、動物たちと空飛ぶ冒険を始め、友情を深めていく。
(権利元 株式会社学研ホールディングス)




04 バンダコパンダ / バンダコパンダ 雨ふりサーカス
株式会社トムス・エンタテインメント




スタジオジブリの大傑作『となりのトトロ』の原型と評された、宮崎駿脚本・高畑勲監督のアニメーション作品。竹林のなかの祖母の家で、一人、留守番をする元気いっぱい少女、ミミ子。そこに突如現れた“バンダ親子”とミミ子の愉快な共同生活が始まる。この不思議なバンダはどこから来たのか、そしてささやかな3人の暮らしは、一体どうなるのだろうか。
(“THE ADVENTURE OF PANDA AND FRIENDS” © TMS All Rights Reserved)



05 シアター・プノンペン
Hanuman Films



ソト・クォーリーカー監督作品。第27回東京国際映画祭「アジアの未来」部門で国際交流基金アジアセンター特別賞を受賞。主人公・ソボン、かつて祖母が出演していたという伝説の映画を観るため、隠された歴史を探る。そこには、ボル・ポト政権下にあったカンボジアの激動の時代と、祖母の秘密の青春があった。カンボジアと映画、二つの特別な過去が明らかにされる。
(権利元 Hanuman Films)



07 DigiCon6 ASIA 優秀作品
株式会社東京放送ホールディングス

優れた若手クリエイターを応援することを目的として2000年にスタートし、アジア13の国・地域が参加する短編映像コンテスト「DigiCon6 ASIA」の優秀作品を無償で貸与いただいております。コンテストに応募したクリエイターの方々にもご快諾いただき、アジアの優れた若手クリエイターのみならず制作されたノンバーバル（言葉のない）作品を活動国で上映させていただいております。2018年度には6作品、2019年度には7作品をご提供いただきました。

上映の流れ

カンボジアの例

1. スケジュールの作成

シェムリアップ州とバタンバン州の映画配達人が、それぞれ上映スケジュールを作成します。学校の休みなどの関係で、季節によって上映頻度は異なりますが、平均して週2回のペースで上映を行っています。

2. 学校へのアポイントメント

広場や寺院など、様々な場所で上映していますが、一番多い上映場所は学校です。授業の関係もあるため、先生に直接会いに行つてスケジュールの調整をすることもあれば、電話で決めることもあります。

3. 上映地へ出発

映画配達人は、普段はトゥクトゥク（三輪タクシー）の運転手をしているため、トゥクトゥクで上映機材（スクリーン、プロジェクター、発電機など）を運びます。

4. 上映の準備

スクリーンの組み立て、発電機やプロジェクターの設置、教室の準備（窓を閉めて教室を暗くするなど）を行います。

5. 映画配達人の挨拶

上映前にWTPの活動や上映中の注意点などを話します。最近では地元の警察官と協力して麻薬乱用防止の啓発活動なども行っています。

6. 上映

いよいよ上映開始です。発電機が止まるなどの上映トラブルが起きることがあるので、映画配達人は上映の間、教室のなかで子どもたちの様子を見守ります。

7. ワークショップ

上映前後には、映画にまつわるワークショップを行います。例えば、主人公がフルート奏者を目指す『ハルのふえ』を観終わった後には、フルートの演奏体験を行いました。

8. 今日の振り返り

ワークショップまで終了した後、子どもたちに今日の感想や学んだことを発表してもらいます。

海外事業部では主に途上国での映画上映に関わる活動を担当しています。具体的には、WTPにご賛同いただいた権利元より上映作品の許諾を得て、現地語に吹き替えを行い、現地で上映を行っています。現地語に吹き替えを行うのは、文字を読むことができない子どもたちや親御さんにもいることに配慮した、私たちのこだわりです。また、映画の世界をより深く体験してもらうためのワークショップや、集まった子どもたちへの麻薬乱用防止の啓発活動なども実施することで、活動が生まれる価値をより高める工夫も行っていきます。

現地での上映は、上映国現地のスタッフや協力者の方に定期的に実施いただく定期上映と、JICA海外協力隊やボランティア渡航者のような一時的にその国に滞在している方などにコンテンツなどを貸し出して実施していただく単発上映の二つがあります。現在、カンボジア、バングラデシュ、ネパールで定期上映を行っており、2019年度の単発上映は、タンザニア、モンゴル、マダガスカル、フィリピンで行いました。

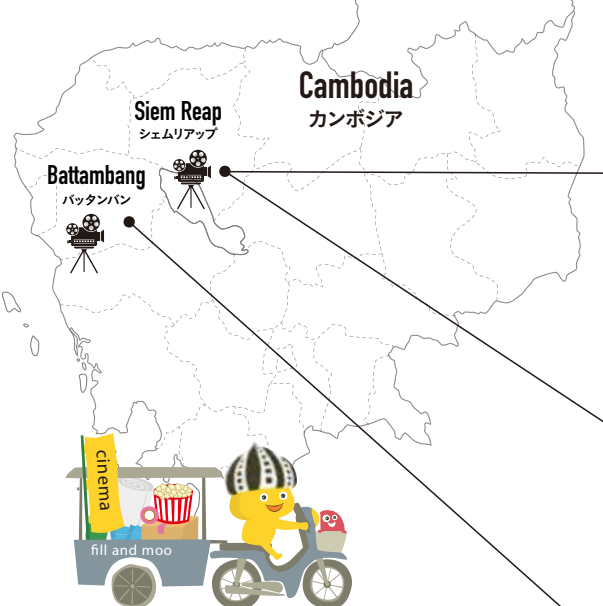
各国の活動の様子は12ページよりご紹介しています。その上映の様子は、WTPのホームページにも活動報告レポートとして随時掲載しています。お時間のある際にぜひご覧ください。

2019年度は約1万4000人の子どもたちに映画を上映することができました。2020年度はカンボジアでの基盤を他の定期上映国に横展開していく形で、バングラデシュ、ネパールの上映活動を大きくしていきたいと思っています。特にバングラデシュではこれまで月1回実施していた上映を月2回に増やし、上映体制を強化していく予定です。

また現在、新規の定期上映国としてミャンマー拠点の立ち上げ準備をしている段階ですので、その実現に向けても努力していきたいと思っています。

WTPホームページ活動報告レポートはこちらから





カンボジアの映画配達人たち

カンボジアでは現地人スタッフ3名が、トゥクトゥクドライバーという本業の傍ら、子どもたちに映画を届ける映画配達人として活躍しています。



ブロム・サムナン

カンボジア拠点のリーダーとして、主に各州のスタッフたちのマネジメントを担当しています。WTPの活動とは別で学校建設にも携わっているため、たくさんの学校や役所の方々とのつながりを持っており、非常に頼りになります。



サマ・ナット

シムリアップ州のリーダーとして、学校とのアポ〜上映までの仕事を担当しています。元々学校の先生をしていたこともあり、強い思い入れを持って主体的に活動に取り組んでくれています。非常に信頼しているスタッフです。



エン・サロン

バタンバン州のリーダーとして、学校とのアポ〜上映までの仕事を担当しています。とても情熱的なスタッフで、上映前に子どもたちにするイントロダクションは、熱が込もっていて迫力があります。



毎回映画を上映した後、先生にインタビューすると、「映画は、子どもたちが自分の未来の夢を叶えるために熱心に勉強しなければならない、と伝えてくれた」「教育になったことに感

現地スタッフから

努力することを忘れてはいけないこと、そのようにすれば夢が叶うことを教えてくれます。映画は、子どもたちに今勉強していることが将来の仕事（夢や目標）につながることをイメージさせ、その目標を達成するために今頑張らなければいけないと気づかせてくれると思います。

先生からの声

・スルック小学校の先生

日本の団体がカンボジアの教育のために上映する映画を観ることができて、本当に嬉しいです。なぜなら、映画を観ることが将来の夢を持つことにつながると思うからです。

現在カンボジアでは、シムリアップ州とバタンバン州を活動拠点として映画上映を実施しています。シムリアップ州はアンコールワットなどで有名な観光都市、バタンバン州はカンボジアのなかでも比較的大きな州で、お米が美味しいことで有名です。各拠点週1〜2回のペースで、学校などで上映を実施しており、現地のスタッフたちが責任を持って上映地の手配から上映、実施の報告までを行っています。2019年度、カンボジアでは延べ1万2622人の子どもたちに映画を届けることができ、同国での活動開始当初からの累計は7万7758人となりました。

約8万人に映画が届く

動した」のような感想を言ってもらえます。これまでは、小学校で教育に係る映画の上映がなかったからだと思います。また、ある学校の先生たちが「自分の学校の子どもたちにもその映画を観せてください」と何度も私にお願いしたこともありました。そして、先生たちはWTPに対して、子どもたちが楽しく笑いながら学ぶことができるように、衛生や環境関係の映画を上映することも願っています。



CAMBODIA

カンボジア

活動開始当初から移動映画館を行っているカンボジアでの事業は、2019年で8年目を迎えました。2016年からは現地人スタッフである映画配達人3名をメインに上映活動を行っています。そんな彼らが責任感と使命感を持って取り組んでいるカンボジア現地の活動についてお伝えします。



画質は悪いですが現地の子どもが撮ってくれたお気に入りの一枚

カメラと映画のディディ ※ディディお姉さん

2019年度の開始月、4月。 Bangladeshを含むアジア諸国の多くでは、新年を迎えます。学校などもお休みで、現地生活が6年目となった私にとって、この時期は日本の1月よりも特別で、活動も休み、お正月を心底堪能します。そんな最中に訪れた村のある家では、「今日はあれを持っていないの?」という視線を送られました。私と言えば「カメラ」と「映画」のお姉さんとして浸透してしまっているのです。嬉しい意味で「ああ結局」という気持ちになり、持っているノートパソコンとデータで、そこに暮らす姉弟にアニメ映画を観せました。これが2019年度の活動の始まりでした。7月、ロヒンギャ語(バングラデシュ・チッタゴン方言に近い言語)での吹き替え作業を始めるために、10日間ほどコックスバザールに滞在し、毎日片道2〜3時間かけて難民キャンプへ通いました。2018年秋に、Bangladeshで「ハルのふえ」を3言語化(公用語であるベンガル語・少数民族言語・難民となっているロヒンギャの言語)することを宣言し、これが最後の一作。日本からこのような途上国に来て初め

て、母語でたくさん映画を楽しめることがいかに恵まれているかを知り、Bangladeshで暮らすあらゆる子どもたちへも、等しく、壁なく、楽しく作品を観てほしいと願いました。どの言語版を制作するときにもそれぞれの苦労と面白さがありました。ロヒンギャ語版でも初の出来事。なんと、子どもたちによる声優で作ることに! 「そうするしかない」という状況だったのですが、結果これこそが最高の喜びを生み出してくれたのでした。上映日には、街からキャンプへ発電機を運

BANGLADESH

バングラデシュ

南アジアに位置する国、Bangladeshでは、2018年度より ChotoBela Foundation (チョトベラ ファンデーション) 原田夏美さんと提携し、移動映画館を定期的に行っていた提供しています。そんな原田さんに、2019年度の活動について振り返っていただきました。

映画配達人 原田夏美 (はらだ・なつみ) さん

日本大学芸術学部映画学科卒業後、ドキュメンタリー制作会社での勤務を経て、学生時代に映像制作のテーマにしたBangladeshに2014年より暮らし始める。主な活動地はチッタゴン丘陵地帯や国境沿いの地域。ロヒンギャ難民キャンプでも活動する。少数民族と深く関わり、記事や映像、ツアーアテンダなどを通して現地のことを伝える。ChotoBela Foundation (2020年5月まで ChotoBela works) を現地登録で立ち上げ、Bangladeshの子どもの「子ども時代(チョトベラ)」を豊かに彩ることを目標に、移動映画館を含めた活動を展開する。クミ族とムロ族の子どもたちが寄宿するキニティウという学校をバンドルボン県でサポートしている。



び込み、日本から支援していただいたばかりのウシオ電機のプロジェクターで映像を映し出し、教室いっぱいにいる子どもたち(外から覗き込む人たちも)へ届けることができました。

・ロヒンギャ難民キャンプの子ども

難民キャンプの小学校は朝9時から13時くらいまでで、教科は英語、母国語のミャンマー語、算数、ライフスキル(簡単な保健や美術)などを学びます。私たちは、毎日13時にキャンプへ着き、吹き替え作業は終業後の教室で行いました。子どもたちは授業

が終わったにもかかわらず、教室に残り、3時間ほどかかるダビング作業を興味津々で眺め、笑っていました。そんな子どもたちが、作品の完成と上映後に言ったのは「次はいつ作りに来るの?」という感想でした。どうやら、上映と同じくらいか、もしかしたらそれよりも、一緒に何か(アニメ)を作った日々が子どもにも心に強く響いたのかもかもしれません。

・とある学校の子ども

事実なので書き残したいと思います。とある学校では残念なことに、初めて上映を中断させられてしまいました。その学校の先生は、「映画よりも勉強だ!」と言って上映を打ち切りましたが、もう一つの世界に入りかけていた子どもたちは、「映画、もう終わりのな?」と私たちに問いかけていました。



空手を習って覚えた1〜30の数を日本語で数える女の子(映画上映前的一幕)

Bangladeshの教育や進学事情を知っているだけに、映画の時間を省かれたことも理解できますが、少し辛い経験でした。

2019年度の振り返り
2020年度の目標

2018年度の報告書でお知らせしていた、ロヒンギャ語の吹き替え版制作は実現できました。現地の映画配達人のハス君(チャクマ族の学生)は、私の不在時にも移動映画館を行ってくださっています。これを執筆している今、Bangladeshは新型コロナウイルスのためにロックダウンの最中です。ですが、またいつか活動を再開できる時期を迎えられたら、Bangladeshでの移動映画館をパワーアップしようという計画です。現地人や日本人の活動参加者の受け入れ、子どもたちへの映画作りミニ教室、オフィスを構えたチッタゴンの街でのストリート上映、移動映画館を通じた教育システムの展開に挑戦したいと思っています!

映画配達人 古屋祐輔（ふるや・ゆうすけ）さん

10年前にネパールの孤児院に行き、子どもたちが柔道を通して心を育てている様子を目の当たりにしたことをきっかけに、同国の柔道支援を始める。その後、日本で教師になった際も長期休暇でネパールを訪れながら柔道の支援活動を続ける。3年前に教師を辞めネパールに移住し、現地に根ざした活動となるように奮闘中。現在は柔道以外にも、教育支援をはじめ様々なNPOと共に活動している。



中止になった活動があったことなどにより、上映回数が少なくなってしまうことは残念です。

ネパールの教育の特徴として、大人からの一方的な押し付けがあります（ネパールだけのことではないかもしれませんが）。「晴らしかった!」の一言しか言えない子どもが多いのです。

なので、私はあえて映画の感想を子どもたちに聞かないようにしています。その代わり、子どもたちには「映画を見て『楽しい』『悲しい』『面白い』など、みんなのすべての気持ちが正しいんだ



天空の映画上映会

私が映画上映に主として携わるようになったのは2019年度の8月からです。上映の際には鞆にプロジェクタールーパーソコン、スクリーンを入れ、両手に子どもたちへのお菓子などを携えて会場に向かいます。

映画館がない遠方の場所でも上映しますが、他にも首都カトマンズの児童養護施設で暮らす子どもたちへも届けるようにしています。カトマンズには映画館がありますが、児童養護施設にはだいたい40名ほどの子どもたちが暮らしており、その全員を連れて行くことと思うとかなりの金額がかかってしまいます。ですので、彼らは首都に住んでいても映画を観る機会などほとんどないのです。

2019年度に上映会を開催できた場所は、エベレスト街道の標高2850mのモンジョ村にあるモンジョスクール、首都のカトマンズにあるチベット難民の子どもたちが暮らすTCP児童養護施設、耳が聞こえないろう者の子どもたちが暮らしている寮などです。

私のビザの関係で昨年11月から今年の2月まで日本に一時帰国していたことや、新型コロナウイルスの関係で

よ」と伝えるようにしています。

『MOVE』（心が動く）から派生して『MOVIE』（映画）という単語が生まれたと聞いたことがあります。大人が勝手に「素晴らしかった」と押し付けるのではなく、子どもたちが自由に心を動かせるように導けたらと思っています。

2019年度の振り返り
2020年度の目標

この文章を書いている今現在（2020年4月23日）、ネパールは新型コロナウイルスの影響でロックダウンし、家に閉じこもって1ヶ月が経っているところです。ネパールは幸いにも感染者は少なく、死者も0人で他国と比べれば平和な状況です。

このコロナウイルスによる影響は、社会のあり方や意義を変えようと思っっています。日本でも学校の休校が長引き、子どもたちの学習を確保するためにオンラインでの授業を試行錯誤しながらも開始し、乗り越えようとしています。実は、ネパールでも先日オンラインでの学校の授業が開始されました。ネパール全土で一斉にというわけではなく、パソコン環境があったりスマホを

NEPAL

ネパール

ネパールでは、2018年度よりネパール人の方にご協力いただき上映活動を行っていました。2019年度からはその活動を引き継ぐ形で、現地に寄り添った活動を続けていらっしゃる古屋祐輔さんと提携し、移動映画館を定期的に行っていただいています。そんな古屋さんに、2019年度の活動について振り返っていただきました。



使用できる人に限られません。それでも概ね日本よりもスムーズに開始したように見受けられました。

2020年度はどのような活動になるか。まずは新型コロナウイルスの早い終息を願い、その後に変化した社会が現れたとしても、臆さず、社会の変化を包み込んだ活動にできればと思っています。



標高2,850メートルのモンジョ村での上映はWTP 至上最高地点となりました。写真はモンジョ村へ向かう途中に通るエベレスト街道の拠点、ナムチェバザール。

2019年度は、WTPの活動にご賛同いただいた団体・個人さまのご協力により、モンゴル、タンザニア、マダガスカル、フィリピンで単発上映を行うことができました。モンゴルとタンザニアでの上映の様子や上映に至ったきっかけについてご紹介します。

モンゴル

モンゴルではNGO Mongoly代表の宮原優哉さんに上映を行っていただきました。

NGO Mongolyは、モンゴルの孤児院や学校へのボランティア活動、日本人に向けたモンゴルツアー企画、日本国内でのモンゴル人と日本人との交流イベントを行う団体です。ご本人がもとも映画好きだったこともあり、WTPが国内で主催する映画上映イベント「丸の内映画ナイト」(現、CINEMA AID)にご参加いただき、そこで代表の教来石と意気投合。モンゴル拠点での映画配達人として現地で上映を行っていただくことになりました。モンゴルは草原のイメージが強いかもしれませんが、首都ウランバートルは発展した都市で、約150万人が



在住しています。2019年夏、モンゴルの孤児院で『映画の妖精 フィルとムー』を上映し、その後粘土を使ったキャラクター製作とストーリー作りのワークショップを行っていただきました。子どもたちが口々に言った感想は「とても楽しかった」「今日たまたま遊びに来たがとってもラッキーだった」など。また、孤児院のスタッフからも「子どもたちはいつも施設のなかにいるので、外から人が来てくれるのはありがたい。いつでもwelcomeです」との言葉をいただきました。帰国後には、11月開催のCINEMA AIDにてモンゴルでの活動報告を行っていただきました。

タンザニア

タンザニアではJICA海外協力隊の尾田達哉さんに映画上映を行っていただきました。

場所はタンザニアの北東部、キリマンジャロ州にあるサンヤジュウ中学校とフカ小学校です。その地域では一家に一台テレビを持っている家庭も多いですが、周辺に映画館はありません。そのため子どもたちにとって、みんなで集まって大きなスクリーンで映画を鑑賞するのは初めての体験でした。上



映したのは『映画の妖精 フィルとムー』と「DigCon6 ASIA」からご提供いただいている作品。子どもたちはとてもワクワクしながら観ていたそうです。学校の先生からは「この活動を通して、生徒たちのなかに想像力が育まれ、能動的な考え方を学ぶことができると感じた」とのお言葉があったと報告いただきました。また、上映後のワークショップとして、「DigCon6 ASIA」からご紹介いただいた原田章生監督作のストップモーションアニメ『ゾウの王様と天使の筆』のアテレコワークを実施。子どもたちは歌うのが大好きだということから、映像と音楽が絶妙にマッチし、メッセージ性も強い本作を選んだそうです。子どもたちはみんなで二つの作品を作り、完成した作品を観て、とても楽しんでいました。

／ フィルとムーインスタグラムの裏側をご紹介します！ ／

私がフィルとムーインスタを毎日更新し続ける理由



WTPの団体マスコットキャラクター「フィルとムー」のInstagram (インスタグラム) を開設し、「毎日かわいいフィルとムーを見られる」と好評をいただいています。その裏側をご紹介しますべく、更新を担当くださっている“中の人”にインタビューをしてみました！

Q フィルとムーインスタにご協力いただいたきっかけや理由を教えてください！

教来石さんが斎藤工さんのラジオにゲスト出演されていた回でWTPさんがデザイナーを募集していると知り、私から連絡させてもらいました。過去に描いた絵を教来石さんに見ていただいたり、フィルとムーを試作で描かせていただいたりした後、Instagramのお話ももらいました。

Q フィルとムーインスタで心がけていることや苦労したエピソードがあれば教えてください！

フィルとムーが私たちと同じ時代を、一緒に生きてるように見せたいです。実際に起こった出来事を反映させたり、季節感を取り入れたいので、描き溜めをせず、いつも旬な状態になるよう心がけています。毎日「今日のフィルとムーはどんな絵にしようかな」と考えています。まったく思いつかない日もあるので、そんな日はとても苦しい(笑)

Q フィルとムーインスタにご協力いただいたきっかけや理由を教えてください！

日々、描けば描くほど、フィルとムーのキャラクターデザインが優れているのを感じています。フィルの輪郭は左右対象ですが、白目があることで様々な方向を向くことができ、表情が豊かです。そして黄色と赤色の二人は黄緑色や水色に映え、自然の中にある姿を描きたくになります。描くのがとても楽しいです。

毎日コツコツ続けることで、一人でも多くのフォロワーさんが増えるよう願っています。そして、一人でも多くの方がフィルとムーを好きになつてくださり、WTPさんのことを知らなくても、グッズを欲しいと思ってくれる。購入後に活動を知って興味を持ってもらう。そうなつたらInstagramを毎日続けた意味が出てくるのでは、と思います。フィルとムーには、私たちと同じ時代を生きているような日常生活と、妖精らしい冒険の日々を交互に送ってもらいたいです。

フィルとムーインスタ 投稿担当者

飯森 ゆみこ さま

1973年 静岡県生まれ。セブ・モードセミナー卒業。現在、東京在住の会社員。一児の母。仕事では、主に幼児向け印刷物のデザイン、イラストを担当。趣味は陶芸。好きな色は黄色。

DOMESTIC PROJECT

国内事業

海外での移動映画館事業を支えるために、国内では支援を募るイベントの実施や、WTPの活動への理解向上を目的としたスタディツアーの企画などを行っています。それぞれの参加費の一部は現地での活動資金にあてています。

《スタディツアー》
日本で生まれ育った私たちがだからこそ、気付けなかったことがたくさんある。それを伝えられるツアーとなりますように。

WTPは旅行会社と提携し、現地の映画配達人と一緒に途上国で映画を届ける体験を、日本のみなさまにスタディツアーという形で提供しています。
主な活動が海外で行われているWTPにとって、スタディツアーは「団体の活動に直に触れることができる唯一の機会」であり、みなさまに活動内容を深く知っていただく貴重な場だと考えています。
村での上映準備や、子どもたちや映画配達人たちとの触れ合いを通して、ご参加いただいた方たちの人生を豊かにしてくれるものを二つでも多く持ち帰っていただきたいと思っています。

《イベント》
私たちが楽しむことで映画を知らない子どもたちに映画が届く。たくさんの夢の種がまかれますように。

イベントに参加する先進国の人が増えれば増えるほど、映画を観ることが出来る途上国の子どもたちが増えていくモデルです。国内では東京を中心に、映画イベント「CINEMA AID（シネマエイド）」や年に2回の活動報告会などを企画しています。将来的には全国で開催することを目指しています。



進化するワークショップ

WTPが主催するスタディツアーでは、実際に参加者さま自身が映画配達人と共に子どもたちへ映画を届けることができます。また、カンボジアについて理解を深めていただけるプログラムもご用意しています。上映会の前にまず勉強会を行い、カンボジアの歴史や文化をご紹介します。その後遺跡や内戦の跡が残る場所を訪れたり、伝統舞踊の鑑賞や村の暮らしの体験を通して、実際にカンボジアの文化に触れていただけます。

ツアーの目玉である映画上映会では、子どもたちと一緒に映画を観るだけでなく、折り紙やボール遊びなどの交流や、現地で活躍している映画配達人からお話を直接聞く機会も設けています。さらには、子どもたちに映画の世界をより深く感じてもらうワークショップも。上映作品の内容に合わせて、音楽や工作などのレパートリーを準備しています。例えば音楽を題材にした映画を鑑賞する前には、音階ゲームやリズムゲームを通して、子どもたちに音楽を身近に感じてもらう予定です。

2019年度のツアーでは工作のワークショップに力を入れました。アニメーション映画を鑑賞した後、子ども

もたちが映画の世界を覗けるように、アニメーションの仕組みがわかる簡単な作品を作って遊びます。

主な取り組みとして、子どもたちに「フィルとムー」が描かれた台紙に塗り絵をしてもらいました。子どもたちは思い思いの色のクレヨンを使って、塗り絵をカラフルに塗っていきます。『映画の妖精 フィルとムー』を観た後に行いましたが、実際のキャラクターと同じ色で塗る子どもはおらず、オリジナルの作品作りを楽しんでいました。その様子から、「自分だけの作品」を作る楽しさを体験してもらおうことで、自分の頭で創意工夫を生むワクワクを知ってもらえるのではないかと感じています。

これらのワークショップは、映画の世界を子どもたちに体験してもらえただけでなく、カンボジアが抱えている詰め込み型教育の問題にもアプローチしています。工作のワークショップでは、映画を鑑賞した後アニメーションの仕組みや原理に触れ、自分たちの頭で考えて再現し、理解してもらいます。これにより、探究型の教育に必要な好奇心を養えると考えています。

参加者とアテンダントの声

参加者 門田惇矢さま(会社員)

・参加動機

学生時代に留学やバックパッカーを経験し海外の人たちと交流することが好きだった私は、海外で厳しい環境で暮らす人々を助ける活動にいつか参加したいという想いをずっと抱いていました。しかしあるとき、ふと「このまま先送りしていたら一生行けないのでは?」と思い急に焦りを感じ始め、すぐにでも参加できる活動はないか探したところ、このツアーに出会いました。子どもの夢の選択肢を増やすという想いに大変共感し、参加を決めました。

・参加した感想

構成が非常によくできていて、普通の旅行では得られない、多くの学びを得ることができました。まずはカンボジアの歴史を学び、次に一般の方々の暮らしに触れることで現状を理解した上で、WTPの本業である映画配達に参加する、という流れによって、目の前の人だけでなくその背景にある問題そのもの向き合うことができました。また地雷撤去、伝統技術の継承、教育支援など様々な形でカンボジアを

支援してきた日本人を知ることによって、使命感が駆り立てられて活動に身が入りました。学校で映画を観せたときの子どもたちの表情は本当にキラキラしていて、素晴らしい活動に参加できた心から思いました。上映後に子ども

たちに今の夢を聞いた場面では、警察や先生という答えが多くまだ身近な職業ばかりという印象を受けましたが、すぐに成果が出る活動ではないので長い目で夢の種をまき続けるしかないと思います。いつか映画をきっかけに夢を実現する子どもが出てくるまで、今後も活動を応援していきます。

アテンダント 筑井康敏さま

(ギフトシネマ会員/WTPアンバサダー)

団体設立初期から支援してくださり、カンボジア駐在経験もある筑井さまに、このたびツアーのアテンダントをご依頼させていただきました。

・参加した感想

高校生から社会人まで幅広い層の参加者がおられました。その一人一人にカンボジアへ行く前と後で明らかに心境の変化があったことを感じ、実際に体験することの大切さをあらためて知ることができました。

人から聞いただけの話は忘れやすい。

本で読んだりテレビで観ることも物事を知ることではあるかもしれない。しかし、実際に体験することによってのみ、本当に理解できるのだと思います。

ツアーでは田舎の生活・食事を体験し、アプサラダンスを観たり地雷博物館やアンコール遺跡への訪問などもしました。もちろん移動映画館の体験や、子どもたちとアクティビティを通して触れ合う時間も。同じ体験をしても、その人の今までの経験、環境、思考によつて物事をどのように解釈するかは千差万別です。それぞれの参加者は様々な体験をどのように吸収したのだろうか、そんな想像を膨らませています。

個人ではなかなか体験できないことが、この短期間でできてしまう魅力。安心して参加でき、幅広い年齢層の参加者と共有する時間は、参加者にも一歩の成長を促す体験になると思います。私を知るこの15年でのカンボジアの変化はすさまじく、アジアのダイナミックな変化を強く感じました。街には様々な業種が増えさらに活気が増し、人々がイキイキと生活しています。今まさに変化し続けるカンボジアを多くの人にも体験してもらいたいと感じます。



2019年度の振り返り 2020年度の目標

2019年度は、WTPスタッフがアテンダントとしてツアーに参加するようになりました。それによって、参加者さまとアテンダントとの距離が縮まり、今まで以上にWTPの活動に対して興味を持っていただくことができました。また帰国後には、WTPが国内で開催するイベント「CINEMA AID」でアテンダントと参加者さまが再会する機会を作るなど、ツアーで生まれたご縁も大切にしています。

一方で、初の試みであるネパールでのスタディツアーの催行が決定していたにもかかわらず、新型コロナウイルスの影響により中止となってしまったことは大変残念な出来事でした。2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により非常に厳しい状況での幕開けとなりました。ですがこんなときだからこそ、今一度ツアーの内容を見直し、質の向上のために前向きに議論を重ねていきたいと思っています。ツアー再開の折には、より学び多き体験をご提供できるよう、メンバー一丸となって尽力してまいります。

STUDY TOUR

スタディツアー

2019年度は、催行回数ならびに総参加人数が過去最多となり、計34名の方にご参加いただきました。2019年度新たに取り組んだことや、ツアー参加者さまの声をご報告します。

CINEMA AID

シネマエイド



映画をもっと、みんなのものに

2019年の秋にスタートしました「CINEMA AID (シネマエイド)」は、WTPが国内で主催する映画イベントです。前身の「丸の内映画ナイト」は、平日の仕事帰りに映画やゲストの話をお酒を飲みながら楽しみ、参加者同士で交流できるイベントでした。しかし、「イベントに参加して楽しむ」活動の「応援」というイメージが浮かびづらいつのご意見をいただき、名称と内容をリニューアルすることにしました。

どなたでも気軽に何度でも楽しんでもいただけるように、途上国の子どものための映画体験を支援するためのイベントであり、WTPの活動をいろいろ側面から知っていただくことを目指しています。具体的には、映画の上映だけでなく、映画配達人をゲストに呼び、各国での活動の様子や想いを語ってもらうなどのコンテンツを設けています。また、継続的にご支援いただくギフトネマ会員さまには特典のご用意も始めました。

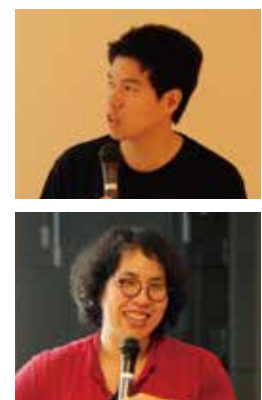
イベントを通して、みなさまのご支援がどんな人の手でどのように使われどんな子どもたちに届いているのか、それを知っていただく機会となりましたら嬉しいのです。

初年度の取り組み

2019年10月10日に、シネマエイド開始に先立ちましてプレイベントを開催しました。この日のコンテンツは、グアテマラの貧困地域で2カ月間にわたって1日たった1ドルの生活をしたアメリカの若者たちの実践ドキュメンタリー『1日1ドルで生活』の上映、そして配給元であるユニテッドピーパー株式会社代表取締役の関根健次さまをゲストに迎え、「映画はきつと、世界をより良くするためにある」と題したトークショーでした。



国ごとに文化や社会は違えども、映画は必要なものであると映画配達人たちは力強く活動を後押ししてくれました。ゲストの一人である宮原優哉さんは、このイベントをきっかけにご自身の活動とつなげる形でモンゴルの映画配達人になりました。このようにCINEMA AIDから第二第三の映画配達人が誕生することも願い、今後も映画配達人をご紹介していきたいと思えます。



2020年2月16日には、次なる試みとして、ギフトシネマ会員さまにご協力いただく形のイベントが実現しました。『スター・ウォーズ』シリーズ完結を記念しまして、会員さままである河原一久さまのご協力のもと、映画パソナリテイの伊藤さとりさんと同作の解説をネタバレ全開で楽しむトークをしていただきました。エンターテイメントとしての映画の力をあらた



めて教えていただくとともに、会員さまと一緒に作り上げるイベントを今後にも模索していきたいと思えました。これをお読みになつている会員さまのなかに企画をお持ちの方がいらつしやいましたらぜひご連絡ください。一緒にイベントを作りましょう!

課題と抱負

現在抱えている大きな問題は、権利の問題で上映できる作品が大変限られていることです。作品をお貸しい

Special Thanks

ウシオ電機株式会社さま
CINEMA AIDの自慢である素敵な会場のご提供

東京キンビレッジサービス株式会社さま
毎回大好評のドリンクのご提供

株式会社大泉工場さま
映画館さながらのポップコーンのご提供

株式会社フューチャーフォークさま
カッコいいオープニングムービーの制作

ただけることもそのまま活動の応援につながります。国内の上映会にお貸しいただける作品がございましたらご連絡いただけますと幸いです。

映画は世界への窓。CINEMA AIDは多くの方とWTPの活動をつなぐ窓に成長していきましたら嬉しく思います。いつの日か、かの有名な「LIVE AID」のように「CINEMA AID」が世界中に広まっていくことを大きな目標に一歩一歩進んでいきます。メンバー一同、みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

関根さまは「平和とは、選択肢があること」だといいます。映画に出てきた「貧困だから働くしかなかった」という子どもや女性たちに選択肢を作ることができれば、それが平和な状態へつながっていく。映画は直接課題解決ができるわけではないけれど、手段・道具として現実世界を変えていくことがある。その事例がこの映画であり、本作は世界中で評判を得て、具体的な融資や支援が生まれるなど、支援の輪がどんどん広がっているそうです。また、関根さまがおっしゃる「世界を変えるには、まず、自分を変えること」、そのきっかけを作る力が映画にはあることを実感するお話を伺えました。

CINEMA AIDとして再スタートを切つてからは、これまでにモンゴルとネパールの映画配達人をゲストに呼んだイベントを開催しました。映画配達人たちは映画の力を次のように話します。

映画は国を越えて人をつなげる。映画は人を育む。

映画は子どもたちの命をつなぎとめてくれる。

そして、映画を届けることはワクチンや食糧を届けることと同じくらい大切なこと……。



一般社団法人ALIVEさまの課題解決プロジェクトにおいて、WTPを支援対象として選定いただきました。このプログラムは、業種・業界が異なる複数の企業から集まるビジネスリーダーたちがチームを編成し、社会や団体が抱える課題の解決策を考えるというものです。

「途上国の子どもに“移動映画館”を届けるための持続可能な収入源を確保せよ」



参加者のみなさまには、3か月間わたるWTPメンバーとの交流を通じてWTPの強みや課題を感じてもらい、様々な改善策をご提案いただきました。いただいたアイデアや施策は、現在も活動の一部に取り入れさせていただいています。

「CINEMAID (シネマエイド)」は、「映画を観ることで、子どもたちに夢の種を届ける」を目的とした映画上映イベントです。映画好きのみなさまに、映画を楽しみながら支援ができることをより身近に感じてもらうために、ご提案いただきました。これまでも参加費が支援になるイベントを行っていましたが、そのイメージがより強く感じられるようにと、このネーミングを考えていただきました。また、WTPと共に映画で支援しているイメージを表したロゴまで作成していただきました。

デンマークよりお迎えした専門家であるハンネ・パールセンさまとインマ・カルベさまより、まずは海外における



講習会の様子

現地では映画上映後に作品に紐づくワークショップを実施しています。子どもたちにとってより良い体験になる工夫を考えていた際に知ったのが、アニメーションを学習やコミュニケーションのツールとし、学習者の様々な能力を引き出し、自信や積極性を育むメソッドである「アニメーターディング」という手法で、導入できないか検討しています。2019年度には、日本での普及・促進活動をされている一般社団法人アニメーターディングらぼの伊藤さまにご協力いただき、ファシリテーター講習会を実施しました。



一般社団法人 アニメーターディングらぼ

WTPはこれまで、途上国をはじめとする国々で延べ約8万人の子どもたちに映画を届けることができました。その実現を後押しして下さったみなさまからのご支援に感謝するため、二度の報告会を開催しました。



WTP 7周年記念イベント

9月7日に団体設立の7周年を記念するパーティを開催しました。会場は池袋駅から徒歩3分の商業施設WACCA池袋の5階にある「もうひとつのaitokoro」さま。

この日のイベントのために、映画に登場するお料理をリクエストさせていただき、『魔女の宅急便』に出てくるニシンのパイや、『となりのトトロ』のメイちゃんのお弁当など、料理長の心の込められた美味しく楽しいお食事をいただきました。



そしてお食事の間では、ドミニカ共和国で映画配達をしていた上林萌柚さんからの報告や、WTPのこれまでの振り返りとこれからのことをお伝えすることができました。

WTP感謝祭2019

12月1日は映画の日。この記念すべ

き日に、WTP感謝祭2019を開催いたしました。会場をご提供くださったのはジャパンシステム株式会社さま。こちらから感謝をお伝えする場であつたにもかかわらず、同社からはなんとご寄付まで頂戴しました。

第一部では、WTP代表・教来石さまらの活動振り返りや、モンゴルで映画配達をしてくださった宮原優哉さんからの報告、そして、「走った距離(km)×100円」を寄付するというユニークな取り組みをはじめ多様なご支援をいただいている、ギフトシネマ会員の筑井康敏さまのMVP表彰式などを行いました。

そして第二部では、「移動映画館が子どもたちの未来にもたらすもの」をテーマにクロストーク。教来石が対談させていただくゲストには、東日本大震災直後より被災地で移動映画館を行ってこられた「にじいろシネマ」代表・並木勇一さまをお招きしました。映画



上映の権利獲得のために、震災直後から大手メジャー配給会社に積極的にコンタクトを取られていたという並木さま。上映権の課題はWTPの場合とも重なることが多くあり、大いに盛り上がりました。

Special Thanks

WACCA池袋さまのご厚意にて、イベントが開催された9月7日より2020年3月7日まで、館内の展示スペースをお借りしてWTPの活動写真を展示させていただきました。ご協力くださったWACCA池袋の鈴木さま・佐々木さま、東京キンビバレッジサービス株式会社の鈴木さま・門平さま、本当にありがとうございました!



鈴木さま



佐々木さま

(WACCA池袋)



鈴木さま



門平さま

(東京キンビバレッジサービス)



スクリーンの世界から現実に

関西支部は、2016年から大阪を中心に関西地域で活動しています。映画が好きで団体の理念に共感した社会人が、関西地域でのWTPの知名度を上げ、支援や映画好きの輪を広げるために活動中。映画をコンセプトにしたイベントを年に数回開催しています。例えば映画に出てくるお弁当やご飯を作るイベントや、参加者と一緒に映画を観て、その後感想などをシェアする「関西たのしねま」など。

2016年より関西地域、2017年より北陸地域にて、そして2019年より新たに中国地方に支部が発足し、WTPの活動を広めるための映画関連イベント開催などを行っています。様々な職種や業種のメンバーが所属しており、それぞれの強みや興味・関心を生かして活動しています。



お花見の時期には大阪城公園で『となりのトトロ』のお弁当を再現するイベントを、夏にはWTP報告会を開催しました。例年開催してきた「関西たのしねま」の醍醐味は、みなで観るのは同じ映画なのに、様々に出てくる感想をシェアし合うことで視野が広がり、まるでその映画を何回も鑑賞したかのように感じられることだと思っています。2019年度はそれに加え、上映する映画を選定する担当メンバーを固定せずに、支部メンバー全員での当番制に変更したことで、上映する映画の幅が増え、参加される方の年齢層や分野を幅広くすることも

2019年度の振り返り
2020年度の目標

参加費は、映画鑑賞料十その後のシェア会でのカフェ代だけ。少人数で、初対面の人同士でも共通の話題（映画）があれば、まるで友だちのように話せてしまうのが特徴です。WTPや映画の良さを知ってもらおう気軽なイベントで、徐々に参加者も増えてきました。また、イベント参加者や関西の映画好きを集めたFacebookコミュニティも運営しています。

きました。より多くの方に、WTPに触れていただく機会を作れたのではないかと感じます。



さつきの手作りお弁当—映画『となりのトトロ』から—

新型コロナウイルスの影響で、家で過ごす時間が長くなり、自宅で映画を鑑賞さしている方も増えていると思います。私たちは、映画の良さは一緒に映画を観ることさらに深まっていこうと考えているので、家にも誰かと一緒に映画を観る体験の提供や、オンラインイベントの開催も検討していきます。また、Facebookコミュニティをもっと動かし、映画情報の発信を中心にみなさまと交流していきたいと考えています。



関西支部サポーター

後藤紗菜 / 会社員

大分県出身。映画と旅行と音楽が好き。関西で映画好きを集めたオフ会なども行っている。

私がWTPに興味を持ったきっかけは、ブラッド・ピット主演の映画『セブンイヤーズ・インチベット』を観たことです。劇中ではチベットの村に映画館がないというところで、みなで「から映画館」を作ります。これを見たときに、現実でも映画という娯楽を知りもしない人たちがいるんじゃないかと思ひ、調べているなかでWTPを見つけたんです。私たちは恵まれた環境のなかで毎日映画を観ることができ、いろんな感情を味わうことができる。映画から様々なことを教わり楽しむことができるの、そんな映画を知らない人たちもいると思うと、その人たちにも映画の魅力を感じたいと感じるようになりました。実際に2019年2月にはWTPのスタディツアーに参加し、カンボジアの農村部に暮らす子どもたちと映画を配達。とてもフレンドリーで人懐っこいカンボジアの子どもたちとの触れ合いや、映画を観るときのキラキラした眼差しは忘れません。本当に素敵な活動に出会えてよかったです。いつかまたカンボジアに映画を届けに行きたいです。

BRANCHES

国内支部

日本国内ではこれまで、東京、関西、北陸でメンバーが活動してきましたが、2019年度から新たに中国地方で支部が発足しました。



中国支部代表
松島彩

中国支部代表の松島彩です。島根県でお芝居やイベントを開催したり、鳥取県で映画やドラマを作ったりしながら、広島県に住んでいます。趣味のハーレーダビッドソンに乗って岡山県や山口県にも遊びに行きます。映画を愛する自由奔放な中国地方放浪者です。女優の桃井かおりさんの話になると止まりません。黒ずくめの洋服が目印です。

立ち上げ一発目、「あなたのコトバ展」を企画しました。映画の名言や身近な人からもらった大切な言葉などをSNSで集め、たくさん飾る展示です。そこにWTPの活動写真も一緒に飾ります。展示を訪れた人同士で会話を楽しくしてもらったり、SNSと連動させることで中国地方でのWTPの認知度をさらにあげる窓口にしたと考えることができました。そして、各県でリレー展示をすることで、中国地方のみんなが

1年目の歩み

2018年の広島豪雨災害で九死に一生体験をしました。「このまま誰のためにもならず死ねるのは嫌だ！」と思いネットをあさっているとWTPを発見。映画を届けて世界を救おうとしている人がいる！「映画女優になつて世界を救いたい」と本気で思っていた幼少期を思い出しました。映画に出ると届けるのでは少し違うけれど、幼いころに女優を夢見たときの気持ちと同じワクワク感。私の住む中国地方でもWTPを広めたいと思いつく動開始を決めました。

女優になって世界を救いたい



「ワールドシアター」というタイトルで制作いただいた切り絵作品

がり、WTPの輪を少しずつ大きくしたいという展望がありました。しかし、新型コロナウイルスの影響により開催は延期ですが、各県で開催を受け入れてくれた施設と確かなつながりができたことは大きな成果でした。また、出雲市在住の芸術家・カジタミキさんより、WTPの活動をイメージした切り絵作品を寄贈していただきました。多くの方に実物をご覧いただきたいです。



2019年度は、メンバーと中国支部の活動についてじっくり話し合いました。幅広い世代への認知度向上のための展示イベントや講演活動、子ども向け映画上映会などのアイデアがありました。しかし、新型コロナウイルスの影響により2020年に企画していたイベントはすべて中止。どのような活動ができるかは再検討していかねばなりません。今すぐにやれることは、SNSを使って個人的に発信していくことのみですが、そこから少しずつ、メンバーを増やしていきたいです。たとえ個人であっても、発信者が多ければ認知度向上につながると思います。来年、延期になっている「あなたのコトバ展」の開催を考えていますが、今の状況が続けば難しいかもしれません。それゆえ、具体的なビジョンを提示できないのが正直な現状ではありますが、このピンチをチャンスとして新たな企画を生み出せるようメンバー同士で連携を取っていききたいと思います。

2019年度の振り返り
2020年度の目標



をやっているの？」と質問してきたので、活動の紹介をしました。遠いカンボジアのこと、そこには映画を観る機会が少ないことを伝えると、「映画楽しいのに、観られないの」とカンボジアの子どものたのしみを真剣に考えてくれ、寄付をいただいたのです。「自分ではなに誰かのことを考えるのに、年齢も国籍も関係ないんだ」と感じる一方で、映画や私たちの活動を知ってもらうために、今後何が出来るだろう、と強く考えさせられました。2020年度は新型コロナウイルスの影響もあり、映画上映会のイベントは予定していません。ですが、北陸地域で私たちの活動のことを知ってもらえるよう、私たちが上映している映画の情報や活動内容をSNSで紹介したり、オンラインでのイベント開催を検討していきたいと思っています。



2019年度の振り返り
2020年度の目標

2019年度の活動のなかでも、私たちにとって初の外部イベントへの出展となった、金沢市主催イベント「協働と交流のつどい2019」に参加したときは忘れられません。そこで、ある小学生くらいの女の子たちと出会いました。その子たちは少し気がなつたのか、私たちのブースに来て「何

北陸支部は、普段は別の本業を持つ社会人がWTPの理念に共感し、立ち上がりました。金沢を拠点に、団体の活動報告会や映画上映会を開催しています。金沢市は人口に対する映画館の数が多く、全国でも上位を争うほど。メンバーやイベント参加者にも映画好きが多いです。2019年度の活動は、映画上映会の開催と外部イベントでの出展を行いました。映画上映会は、大正時代から残る町家を改装した会場を使い、「金澤町家シネマ」と銘打って開催しています。2019年度は、『アレッポ 最後の男たち』、『1日1ドルで生活』など、ユナイテッドピープル株式会社さま配給の映画をメインに上映しました。グアテマラでアメリカの大学生4人が1日1ドルの生活を行うという内容の『1日1ドルで生活』の上映会には、国際協力に興味のある学生たちが参加してくれました。金澤町家シネマは「映画好き」や「社会人」の参加が多いので、海外などに興味のある学生が参加してくれたことは、WTPの活動をより多くの人に知ってもらおう上でも、良い機会になりました。

石川県に、映画文化あり



北陸支部サポーター
村谷佳奈/会社員

石川県生まれ。2017年よりサポーターとして北陸支部のイベントなどに参加。

小さいころ、国内外のSFや特撮映画に夢中になり、そこから色々なことを学びました。例えば、「違い」は隔たりではなく認め合えれば力になること、「正しさ」は唯一絶対ではないこと、「強さ」は拳に宿るわけではないこと...など。自分がそうだったように、映画を通して子どもたちが様々なことを知るキッカケを得られればと思い、微力ながら北陸支部をお手伝いしています。

活動を通して、映画は年齢やバックボーンが違っても一緒に楽しむことができるものだと思えるため感じます。「金澤町家シネマ」では、県外から引っ越してきたばかりの方や潜在中の方が観に来られて、地元の方と交流するということもあり、初対面でも会話が弾むのは、やはり同じ空間で映画を観るという体験の為せることだと思います。

活動場所は金沢中心になりますが、映画館のない能登地方でも、機会があれば活動したいと思っています。

World Theater Project Youth の紹介

ここでは、いつもWTPを応援してくださっている協力団体であるWorld Theater Project Youth (WTP Youth) をご紹介いたします。WTP Youthは、WTPを応援している高校生・大学生によって構成される学生協力団体です。「WTPの認知度向上」を目標に掲げ、若い力でWTPの輪を広げてくださっています。そんなみなさまから、2019年度の活動報告を寄せていただきました。



WTP Youthは、WTPをより多くの方々に知っていただくことが学生にできる最大の応援だと信じ、「高校生東京支部」「神戸大学支部」「北海道支部」の3つの拠点で活動しています。2019年度は日本国内での映画上映イベントの開催をメインに活動し、そのなかでWTPを紹介することで参加者のみなさまに活動を知っていただくことを目指しました。高校生東京支部では、ユニテッドピープルさま配給映画『ザ・デー・アフター・ピース』の上映会を開催することができました。神戸大学支部では、神戸大学医学部の方々が中心となってボランティアを行うOpen Future Clubさまと協働し、無償貸与していただいている「DigitConto ASIA」のショートムービーの上映会を同大病院の小児病棟で行いました。

反省することが多かったと感じています。メンバーを先導する立場を務めるなかで、自分の説明が不十分であったり、イベントの計画を上手に実行できなかったりと、組織マネ

Q この一年の活動を振り返って、
だけ。

もともと様々なことに興味があり、多くのイベントに参加していました。そうしているうちに、団体に入って同じ興味を持っている人と同じ目標に向かい活動することに魅力を感じました。そんな思いを抱いている中で、できた友だちがWTP Youthメンバーで、彼女の紹介でWTPとの縁が生まれました。

Q WTP Youthへの参加動機は？

WTPを応援する活動は、学生である私たち自身の成長にもつながっています。ここでは、高校生メンバーの声を紹介させていただきます。いただいた学びを生かして、今後よりWTPを力強く応援していければと思います。

Q WTP Youthへの学びを今後どう生かしたいですか？

ジメントをする上で正すべきことがたくさんあることを痛感しました。そんななかでも活動についてきてくれた二年生のおかげで、定期ミーティングでの意見交換やイベント開催などをすることができました。

どんな小さなグループであつても組織管理は大変なのだということを学べました。今後、自己流だけで運営に携わるのではなく、大学で関連する授業を取ったり本を読むなどして、それを実践していきたいと思っています。何より、仲間の意見を大切に、自分の考えだけにとらわれないように心がけていきたいです。



高校生東京支部

神作拳真 / 高校3年生

幼少期のゴミ拾い活動や、中高時代の外国人への進路案内・日本紹介を通じ、行動する勇気を得る。現在は中国語を勉強中。来年、中国の大学へ留学予定。

World Theater Projectで活動するメンバーに聞いてみた！

私が移動映画館を行う団体でボランティアをする理由



映画界で活躍するメンバー
映画会社勤務
亀井稔(かめい・りょう)



WTPでは、業種・職種を問わない様々な分野で働く20名ほどの社会人メンバーが、ボランティアとして活動しています。その裏側をご紹介するべく、メンバーに活動への参加理由や仕事とWTPの活動のつながりなどについて聞いてみました！

Q WTPの活動に参加したきっかけは？

大学一年生の冬、都内のミニシアターでたまたま見つけた一枚のチラシにWTPのスタディツアー募集が書かれていました。「自分の大好きな映画が、誰か人のためになるなんて！」と驚き、すぐに参加を申し込めました。

Q WTPでの活動と仕事(私生活)のつながりを感じるエピソードを教えてください！

生まれて初めて映画を観る子どもたちの目が忘れられず、WTPにメンバーとして参加しました。学生組織であるYouthでの活動経験を経て、今はスタッフ事業を主に担当しています。この経験が就職活動で話し、この春からは希望していた映画会社に勤めることになりました。子どもたちに夢の種を届けに行つたはずなのに、逆に子どもたちに自分の夢を叶えてもらうことに。いつか恩返しをしたいです。

Q 今後、WTPでどのような活動をしていきたいか教えてください！

引き続きスタッフ事業に注力するとともに、子どもたちに映画をより楽しんでもらえるよう、新しいコンテンツの獲得や制作にも挑戦していきたいと思っています。そのために、映画会社で働くなかで映画に関する知識を積極的に蓄えていきたいです。私の社会人としての目標は、海外市場でも受け入れられる日本映画の制作です。まだ私は新入社員ですが、今から多くのことを学び、将来本業とWTPでの活動に接点を持たせることができれば嬉しいですね。2020年4月に亡くなられた大林宣彦監督が、このような言葉を残されています。

映画で歴史を変えることはできないが、未来の歴史を変えることはできるかも知れない。本業でもWTPでも、映画を通して未来へつながる種まきができるよう、両軸ともに力を注いでいこうと思います。

この春中央大学文学部を卒業し、映画会社に就職。大学一年生のときにWTPと出会い、学生団体「World Theater Project Youth」の立ち上げメンバーとして活動。現在はWTPの本部にてスタディツアーを主に担当している。好きな映画は『レ・ミゼラブル』(2012)、『雨に唄えば』、『レオン』など。映画のチラシとサウンドトラック収集が趣味。

『セブンルール』にて、代表の
教来石を取り上げていた
きました

2020年1月7日(火)放送のフジテレビ系列番組『セブンルール』にて、代表の教来石をご紹介いただきました。この番組は、様々な分野で活躍する女性を主人公に、その女性の人生観を7つのルールをもとに映し出すドキュメンタリーです。

民報番組にてこれほど長く取り上げていただくことは初めてであり、団体にとってたくさんの方に活動を知っていただけたことも貴重な機会となりました。

番組のなかでは、国内でのイベントや日々のミーティングだけでなく、カンボジアへの渡航にも密着いただき、活動や教来石の根底に流れる7つのルールを見つけていただきました。活動開始当初のエピソードや『映画の妖精 フィルムとムー』を制作した話、さらには現地の映画配達人の想いにまで迫っていただいた撮影映像に加え、スタジオの秀逸なコメントで教来石の人物が十分に伝わる内容でご紹介いただきました。

放送後には、番組をご覧くださった方々より、ギフトシネマ会員になりご



教来石小織の7RULES

1. 字幕ではなく吹き替えにする
2. 映画を作るときはセリフは無くす
3. ここぞというときは長文を書く
4. ビジネスコンテストで活動費を稼ぐ
5. 自分が出来ないことは人に任せる
6. 仕事に誇りを持てる人を雇う
7. 上映中は子どもの顔を見る



映画好きのお母さまと幼少時の教来石 (番組中で紹介された写真)

寄付いただいたり、教来石宛てにあたたかいメッセージをいただくなど、たくさんの方からの反響がありました。また、法人の方からお問い合わせをいただき、W T P の活動をご支援いただけるとなりました。

今回『セブンルール』にてご紹介いただいたことで、これまでW T P を知らなかった方々にも活動に共感いただき、応援いただけるようになり大変嬉しく思います。

その他メディア掲載

- ラジオ 「～ JK RADIO ～ TOKYO UNITED」 コーナー「COME TOGETHER」(ナビゲーター：ジョン・カピラさま)
- 新聞 山陰中央新報、中国新聞
- テレビ NHK WORLD「CHANGE MAKERS」他

株式会社ライブリンクス さま

福岡に拠点を置かれ、ソフトウェア受託開発・保守、プロダクト企画開発・販売、ウェブコンテンツ制作・デザインなどの情報サービス業を展開されている企業さまです。「OUR EDGE よりよい仕事をし、人と人をつなげてプラスになっていく。」を掲げて事業展開されています。



株式会社ライブリンクス
代表取締役
浅香 守夫 さま

《応援メッセージ》

発展途上国に「食糧」や「ワクチン」ではなく「映画館の映画」を届ける。それは「映画館の映画」にしかできないことがあるから。

近年は発展途上国にもデジタルの波が押し寄せて、映画をスマホで観る時代となりつつある状況です。しかし、先進国では今も「映画館の映画」に多くの人が並びます。やっぱり「映画館の映画」にしかできないことがあるのだと、移動形式であってもやっぱり「映画館の映画」を届けるべきなのだと思います。夢の種まき、心からの応援を送ります。

thomas 株式会社 さま

東京都に拠点を置き、ソフトウェア開発・設計・製造・販売やシステムコンサルティング業務、地域特産物の流通・コンサルティングなど多岐にわたる事業を展開されている企業さまです。衰退してしまった地域、次世代への教育に真剣に向き合い、「地域社会に光を灯す」ために創業されました。



thomas株式会社
Founder
広瀬 和行 さま

《応援メッセージ》

創設者の広瀬さまとは、以前に「社会貢献をする組織の在り方」についてお話しする機会に恵まれ、次世代教育の支援や子どもたちへのIT事業の展開など、様々な展望を伺っておりました。その後「セブンルール」をご覧いただいたことをきっかけに、W T P の活動について深く知ってくださり、ご支援のご連絡をいただきました。広瀬さまが目指される『公的な機会の提供』というキーワードとW T P の活動内容が重なり、企業としてギフトシネマ会員になっただけだのみならず、「今後も何か一緒にできないか」と大変ありがたいお話も頂戴しました。

「すべての子どもたちに映画体験を届ける」という理念に共感し、当社が掲げる次世代教育支援の環として、thomasはW T P さまのギフトシネマ会員として参画させていただきました。何よりW T P さまの支援活動が各国の地域に根付いている様子を拝見し、当社一同、心から感銘を受けました。現地の子どもたちの笑顔につながりだけでなく、教育という側面からもサポートしているプロジェクトは本当に素晴らしいと思います。当社も引き続きみなさまと一緒に様々な支援に寄り添っていけたら幸いです。

企業さまからの寄付・支援

様々な業界の企業さまより、ご寄付、自社商品のご提供、イベント会場のご提供、寄付型自動販売機の設置、その他協同事業など、様々な形でご支援をいただいております。

2019年度にご支援・ご協力いただいた企業・団体さま（敬称略・順不同）

株式会社ソーケン／株式会社オーエス／株式会社学研ホールディングス／株式会社東京現像所／株式会社白組／株式会社トムス・エンタテインメント／株式会社新日本映画社／株式会社ファンドクリエーション／株式会社ウィット／株式会社バリュープレス／株式会社ブレア／株式会社大泉工場／株式会社ゲルニカ／株式会社ライプリングス／株式会社vivito／株式会社フューチャーフォーク／株式会社ジェイフィール／株式会社プギ（本棚お助け隊）／ウシオ電機株式会社／ジャパンシステム株式会社／チャンネルオリジナル株式会社／thomas株式会社／東京キリンビバレッジサービス株式会社／グローバルアセット株式会社／大王パッケージ株式会社／テラサイクルジャパン合同会社／吉祥寺フランス語学院合同会社／しろひげ在宅診療所／社会福祉法人きらめき会／大江橋経営／boum／弁護士法人ネクスパート法律事務所／パルシネマしんこうえん

SUPPORT

様々な支援のカタチ



コスチュームジュエリーブランド
kumiko japan
kumiko さま

《応援メッセージ》

初めてWTPさんの活動を知ったとき、葉やワクチンではなく「映画」を届けるというところに惹かれました。と言うのも私自身、一本の映画に救われた経験があったからなのです。

今、世界中で大変なことが起きています。先の見えない日々の中、映画を含めたエンターテインメントはまるで、ひとすじの光のように、心を癒し、栄養不足の心をも救いあげてくれます。映画のチカラを必要としている子どもたちへ、再び映画が届く未来が訪れますよう、祈りを込めます。

心より応援しております。



会社役員
深谷 旬 さま

《応援メッセージ》

はじめ私はWTPが何をしているのか、何も知りませんでした。妻から薦められた『ゆめのはいたつにん』という本を読んでその活動を知ったのです。妻は斎藤工さんの大ファンで、彼がその本をお薦めしていたようで…。「映画は夢の種まき」、その言葉が心に刺さったのを覚えています。WTPは、映画を観ることがない、いや映画を知りもしない子どもたちに夢を届ける活動をされているのだと知ることができました。

「こんな自分でも微力ながら何かしたい！」という思いに駆られ、WTPに参画させていただきました。この活動はさらに大きな輪になり、世界の隅々まで映画を届け

ることになるでしょう。これからも心から応援させていただきます。世界は今、苦難の時期となりました。活動も制限され心も暗くなりがちです。でも明日を夢見ることが出来ます。そんな夢を届けるWTPに今後も期待しています。

株式会社ソーケン さま

オフィス、ショールーム、美術館、博物館の設計施工デザインや店舗再生、IT・webデザインなど様々な事業を展開されている会社さまです。代表取締役の有吉さまは、公益財団法人の理事、環境省登録団体での地域活性化プロジェクト、かわさきFMのパーソナリティ、CSRアニメ映画のプロデューサー、デザイナーや社会起業家の育成などに携わり、本業を基本とした企業のCSR活動にも積極的に取り組まれております。



株式会社ソーケン
代表取締役社長
有吉 徳洋 さま

イオンタウンやライブ会場にて定期的にアーティストやパフォーマーのみなさまとCSRイベントを開催。イベントにお越しになった方にWTPの活動についてお話しし、寄付を集めてくださっております。

《ご支援のきっかけ》

WTPさまへの支援のきっかけは、弊社のNPOさまの支援活動を知っていたCSR仲間の方がご縁をつないでくださったことでした。映画を通じて発展途上国の子どもたちを応援するという行動に

は、当時は学校や食事を応援する団体がほとんどのなかで驚きました。娯楽を応援するというのはすごいアイデアで、人間は娯楽もあって成長すると思っているので、そこに感銘した次第です。

《応援メッセージ》

発展途上国への、映画という娯楽を通じての応援は今でも少ないなかで、地道に活動しているのは素晴らしいことだと思います。少し古いですが、水野晴朗さんの「いやあ、映画って本当にいいもんですね〜」は、まさに子ども

たちへの教育のスタートでもあると思います。これからも応援しますので、世界の子どもたちに映画を通じて応援お願いします。



支援のご案内ページ



継続的にご支援いただける方を募集しております！



ギフトシネマ会員

World Theater Projectでは、月々 300円から子どもたちに映画体験を贈っていただく「ギフトシネマ会員」を募集しております。みなさまによるご支援で、これまでに延べ約8万人の途上国の子どもたちに映画を届けることができいております。

公益財団法人
東京コミュニティ財団 さま

公益財団法人東京コミュニティ財団さまは寄付者とNPOをつなぐプラットフォームとなっている財団さまです。両者の間に立ち、「寄付者からの想いや寄付」と「NPOからの感謝の気持ちや活動報告」を双方へ届けておられます。



同財団の「ファンドクリエイション基金」では、「次世代を担う子どもたち」「医療・福祉分野」「環境分野」「災害復興」の4分野へのご支援を行っております。

未来を担う子どもたちの情操・道徳教育に向けて、WTPが行っている東南アジアでの移動映画館やワークショップ事業に対して、2015年から助成いただいております。

《応援メッセージ》

当財団は、「生まれ育った環境に関係なく子どもたちが人生を切り拓ける世界をつくる」という貴法人の理念に賛同しております。現在行

われている移動映画館事業を進展させていただくとともに、今後も子どもたちの未来に向けた活動を、さらに広く世界に拡大していただくことを期待しております。



株式会社大泉工場 さま

2017年に創業100年を迎えられた歴史ある企業さまです。「地球を笑顔で満たす」という企業理念のもと、不動産事業やフードマシン販売事業など多岐にわたる事業を展開され、関わるすべての人や環境を笑顔にできる仕組みを創り続ける企業を目指し活動されています。



株式会社大泉工場
代表取締役
大泉 寛太郎 さま

代表取締役の大泉さまと教来石が共通の知人からおつなぎいただいたことが最初のきっかけでした。同社はポップコーンマシンの販売を手掛けているため、映画とのつながりもあり、WTPの活動理念に共感いただき、国内でのイベントにポップコーンマシンをご提供いただきました。おかげさまで、会場が美味しいポップコーンの匂いで満たされ、より雰囲気のあるイベントとなりました。

《応援メッセージ》

教来石さんとお付き合いは、かれこれ3年。

初めてお会いしたときに伺った、彼女の「夢の配達人」としての活動に、当方も今も魅了されております。自分も「世界で鳴り止まない銃声を、ポップコーンの弾ける音に変えることで戦争をなくし、地球を笑顔で満たしたい」と考え、細々と活動をしておりますが、規模が違う。でもいつか、子どもたちが彼女の届ける映画を観ながら、自分の弾くポップコーンを楽しんでくれる姿を一緒に見れる日は訪れるだろう。それまで共に、活動を続けていきたいと思います。

ウシオ電機株式会社 さま

ウシオグループさまは1964年の創業以来、光を「あかり」「エネルギー」として扱う事業を展開し、人々の生活やものづくりを支えておられます。特に映画・映像業界においての影響力が強く、ウシオ製シネマ用クセノンランプは全世界の映画館の約65%で採用されている他、クリスティ製デジタルシネマプロジェクターは世界シェア約35%を有していらっしゃいます。



ウシオ電機株式会社
経営企画部
山田 宏一 さま

映画館への年間サポートもしていただけにになりました。

《応援メッセージ》

生まれ育った環境に関係なく子どもたちが人生を切り拓ける世界をつくる。

ハリウッドを中心とする映画業界をはじめ、各種産業・研究分野など様々なシーンで活用されているクリスティのプロジェクター、Christie Capiva DUW 350Sを2台ご提供いただきました。1台はバングラデッシュの移動映画館で活躍しています。また、かねてよりWTPのイベント開催に素晴らしい会場をお貸しくださいただけでなく、毎回ホスピタリティ溢れる対応をしてくださる社員のみならずWTPメンバー一同感激しております。2019年度4月より、グループ横断プロジェクト「ウシオドリームプロジェクト」を発足され、途上国での移動

このWTPの理念は、私たち企業に対してもその存在意義を問うていただきます。映写機の性能や品質といったこれまでの経済価値だけではなく、それらを通してどのような社会価値をこれから提供できるか。世界中の子どもたちに笑顔が溢れるまで、WTPの活動をサポートしてまいります。

株式会社ゲルニカ さま

「Charged by GUERNICA」を合い言葉に、新しい未来の形を切り拓き、様々な形のエネルギーを、世界中に届けている企業さまです。



株式会社ゲルニカ
代表取締役
伊勢木 博貴 さま

上映会を開催していただきました。

《応援メッセージ》

弊社の顧問弁護士を通じて教来石さんを紹介いただき、その活動内容を聞いて私たちは深く感銘を受けました。また昨年はカンボジアにも同行させていただき、子どもたちが目を輝かせて映画を観ている姿や、終了後に無邪気に笑い、語らう姿を見て、その活動の素晴らしさを実際に体感させていただきました。この素晴らしい活動を引き続き継続してまいります。微力ながら応援しております。

カンボジアでの移動映画館に蓄電池3台をご提供いただきました。これまでの上映では発電機の大きな音が悩みの一つでしたが、ゲルニカさまの蓄電池により静かな上映が可能となりました。また、7月7日七夕の午後、恵比寿ガーデンプレイスで同社が世界で初めて開催した蓄電池エネルギーで上映する野外映画祭『THE POWER OF CINEMA charged by GUERNICA』映画がコロナにみちてゆ〜に教来石が登壇する機会もいただきました。9月には社員のみならずカンボジアに渡航され、現地の映画配達人と共に大きな映画

フィルとムーグッズ購入

“Buy One, Give One Cinema”（商品を買くと、途上国の子どもに映画が届く）をコンセプトに、団体マスコットキャラクターであるフィルとムーのギフトアイテムを公式オンラインショップにて販売しております。商品をご購入いただいで得た利益は、子どもたちに映画を届ける活動に活用させていただいております。2018年度には、この仕組みが評価され、グッドデザイン賞を受賞いたしました。2019年度に登場の新商品もたくさんの方々にご利用いただき、多くの子どもたちに映画体験を届けることができております。



Buy One, Give One Cinema

・FILL and MOO 2020年カレンダー

今年誕生した、季節に合わせたフィルとムーの絵柄が特徴のカレンダーです。来年版の販売については、、、乞うご期待！



・フィルとムーオリジナルTシャツ / World Theater ProjectオリジナルTシャツ

1番人気は、団体のロゴやフィルとムーがプリントされたTシャツです。Tシャツを着て、フィルとムーをいろんなところに連れて行ってあげてください！



フィルとムー公式オンラインショップ

書籍購入

団体の軌跡について描かれた代表・教来石の著書『ゆめのはいつつにん』（センジュ出版）を販売しております。2012年当時、前例のなかった途上国での移動映画館を開始し、後に延べ8万人の子どもたちに映画を届けることになる物語の原点。それまでなかった途上国での移動映画館を切り拓いたのは、ごく普通の派遣の事務員でした。WTPの活動のことを知りたい方、途上国での移動映画館を始めたい方、自分の道に迷っている方にぜひお読みいただきたい一冊です。日本で移動映画館を行う俳優の斎藤工さんもブログで「七回くらい涙が溢れた」とご紹介くださいました。ご購入いただけますと、売上げの一部が団体への寄付となります。



みなさまのあたたかいご支援により、多くの途上国の子どもたちに映画体験を届けることができておりますこと、心より感謝申し上げます。私たちの活動はみなさまからのご支援により成り立っております。世界中の子どもたちに映画を届けられるように、スタッフ一同、より一層邁進してまいりますので、引き続きあたたかく見守ってくださいますと大変心強く、嬉しく思います。

東京キリンビバレッジサービス株式会社

×

World Theater Project

寄付型自動販売機の設置

2017年より、東京キリンビバレッジサービス株式会社さまとのコラボ自動販売機設置が進んでおります。ドリンクをご購入いただくと、売上げの一部がWorld Theater Projectへの寄付となります。東京キリンビバレッジサービス株式会社にお勤めの門下さまより熱いメッセージとともにご提案いただき実現したこのプロジェクトですが、これまでに合計13台の自動販売機を設置いただいております。設置にご協力いただいておりますみなさまに、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

株式会社 vivito さま

「世界のコミュニケーションを進歩させる」をミッションに掲げ、デジタル動画事業を基盤に、コミュニケーションツール開発・動画制作受託・制作人材マッチング・派遣など多岐にわたるサービスを展開されている企業さまです。



株式会社vivito
代表取締役
辻 慶太郎 さま

かねてより活動を応援して下さっていたvivitoさまも、2019年8月に寄付型自動販売機を導入してくださいました。

《応援メッセージ》

WTP寄付型自動販売機を設置でき、大変嬉しく思っています。ご来社くださるお客さまや弊社社員に、間接的にでもWTPに興味を持ってもらい、検索などを通じて活動を少しでも知ってもらうきっかけになれば幸いです。

シンプルに、WTPの活動を応援したい。また、ステークホルダーのみなさまに寄付をもっと身近に感じ

てもらいたい。そう思ったことが元々の動機です。小さい協力ですが、今後も応援していきますので頑張ってください！

映画制作にも携わる企業として、途上国の子どもたちに映画を届ける活動を応援できることを大変嬉しく思います。



古本寄付

不要となった本を「本棚お助け隊」にお送りいただくと、査定金額がWTPの支援金となり、間接的に途上国の子どもたちに映画体験を届けることができます。東京都文京区に籍を置く本棚お助け隊（株式会社ブギ）の菅原さまよりお声がけいただき、2018年度よりスタートした古本チャリティ募金です。ご自宅に眠っている本で、一緒に夢の種まきにご参加いただけましたら幸いです。

本棚お助け隊（株式会社ブギ）

×

World Theater Project

貸借対照表 (2020年3月31日現在)

(単位:円)

科 目	金 額	
I 資産の部		
1. 流動資産		
現金預金	2,806,034	
未収金	0	
棚卸資産	0	
流動資産合計		2,806,034
2. 固定資産		
(1)有形固定資産		
車両運搬具	0	
有形固定資産計	0	
固定資産合計		0
資産合計		2,806,034
II 負債の部		
1. 流動負債		
未払金	54,580	
預り金	22,640	
流動負債合計		77,220
2. 固定負債		
固定負債合計		0
負債合計		77,220
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	2,217,285	
当期正味財産増減額	511,529	
正味財産合計		2,728,814
負債及び正味財産合計		2,806,034



みなさまからのご支援のおかげで、多くの子どもたちに映画を届けることができました

NPO法人 World Theater Project より 感謝の気持ちを込めまして

活動計算書 (2019年4月1日から2020年3月31日まで)

(単位:円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1. 受取会費		
正会員受取会費	68,400	
賛助会員受取会費	1,917,000	1,985,400
2. 受取寄付金		
受取寄付金	508,942	508,942
3. 受取助成金等		
受取民間助成金	50,000	50,000
4. 事業収益		
イベント開催事業	231,539	
スタディツアー事業	247,000	
グッズ等販売事業	446,614	
非劇場上映事業	151,956	
その他事業収益	109,703	1,186,812
5. その他収益		
受取利息	18	
雑収益	0	18
経常収益計		3,731,172
II 経常費用		
1. 事業費		
(1)人件費		
人件費計	0	
(2)その他経費		
会議費	187,305	
業務委託費	1,241,282	
広告宣伝費	98,074	
仕入高	683,644	
支払手数料	116,888	
通信運搬費	37,903	
旅費交通費	274,198	
その他経費計	2,639,294	2,639,294
事業費計		2,639,294
2. 管理費		
(1)人件費		
人件費計	0	
(2)その他経費		
印刷製本費	127,453	
交際費	116,384	
支払手数料	29,194	
諸会費	33,000	
消耗品費	186,176	
通信運搬費	78,142	
旅費交通費	10,000	
その他経費計	580,349	580,349
管理費計		580,349
経常費用計		3,219,643
当期正味財産増減額		511,529
前期繰越正味財産額		2,217,285
次期繰越正味財産額		2,728,814



**World
Theater
Project**

 <https://worldtheater-pj.net>

 info@worldtheater-pj.net

 [@catic0901](https://twitter.com/catic0901)

 [worldtheaterproject](https://www.facebook.com/worldtheaterproject)

 [@world_theater_project](https://www.instagram.com/world_theater_project)